

ビュフォンの「人間誌」（『自然誌』より）その1

西 川 祐 子*

Sur 1'«Histoire naturelle de l'homme»de Buffon

Yuko Nishikawa*

HISTOIRE NATURELLE, GÉNÉRALE ET PARTICULIÈRE. AVEC LA DESCRIPTION DU CABINET DU ROI.

Tome Second.



A PARIS,
DE L'IMPRIMERIE ROYALE.
M. DCCXLIX.

ビュフォンの『自然誌』1749年版，第2巻のタイトルページ この巻より「人間誌」がはじまる

第1章 ビュフォンの『自然誌について』

ビュフォン（Georges-Louis Leclerc, comte de Buffon 1707-1788）の『自然誌』（博物誌とも訳す）（1749-1804，44巻）は，完成までに，半世紀以上の年月を要した大著である。

『自然誌』は，『一般および特殊の自然誌，王の標本館の描写を附す』（«Histoire naturelle, générale et particulière, avec la description du Cabinet du Roi）という長い原題をもっている。

*外国語系列（Department of Liberal Arts and Sciences—Foreign Languages）

ビュフォンは、1739年に、王の植物園および蒐集館の監督官 (intendant) に任命され、1788年に、同園において死ぬまでこの職にあった。現在もパリ五区にあり、植物園 (Jardin des Plantes) とよばれて親しまれている同園の歴史は古く、ルイ13世が1626年に下した創立勅令にまで遡る。大革命後は、国立自然誌博物館となって、現在にいたっている。ビュフォンは、いわば王立植物園長と標本館つまり博物館の館長を兼ねていたのであり、『自然誌』は、ここに集められた標本や情報にもとづいて書かれたのである。

ビュフォンは、1749年出版の第1巻において、フェルナン・ド・マジェラン (1519年, 1124日)、フランソワ・ドレーク (1577年, 1056日)、トマス・カヴェンディッシュ (1586年, 777日) による世界一周ののち、約一世紀のあいだ、新大陸発見の熱意が一時、低下していることを指摘している。

大航海時代の航海者たちによって、地球は丸いことが証明され、地球という空間の拡がりがいちおう、確かめられたのであるが、まだ南極に北極、アフリカ大陸の内陸、北アメリカ北部および、オーストラリア大陸のほとんど全部が知られていなかった。オーストラリアについては、喜望峰の氷と霧の妨害で、オーストラリアへの接岸がむずかしく、逆まわりの新航路が探されている。「日本国皇帝が、外国人によるエゾ沿岸の航海を禁じてさえいなかったら、インド会社はきっと新航路発見に成功していたであろう」⁽¹⁾という記述も見られる。

世界地図の空白は、この後もしばらくは埋めつくされることがないのであるが、その一方で、ひとたび発見された航路の周辺には、貿易商人、キリスト教伝道者、あるいは植民地への入植者たちが入りこみ、ヨーロッパへむけて物資とそして情報を送ったのであった。

ビュフォンが管理していた王立植物園は、ビュフォン以前から、海外情報の集まる中心地の一つであった。トゥルヌフォール (Joseph Pitton de Tournefort 1656-1708) のように、植物園所属の専門の生物学者が、情報と標本蒐集の目的で自ら旅行するということも、むろんあったが⁽²⁾他の公務をもつ軍人、行政官あるいは伝道者、医師が植物園またはアカデミーから委託されて蒐集を行うことが多かった⁽³⁾。また、植物園の名声が高まるにつれて、私的コレクションの寄付や海外旅行者のもたらす情報、標本、生きている動植物の量はふえていった。ビュフォンは、植物園を管轄しているあいだに、敷地の拡大、動物園部分の充実、コレクションの寄付をつのることに努力を払っている。

『自然誌』はこうして長年のあいだに集められたばう大な資料の集大成、分析と総合をめざしている。象徴のレベルでは、フランス国王の手元に集められる世界の富のリストアップでもある。世界地図は細部がまだ完成に至ってはいないが、すでに、地球上に生息するあらゆる動物、繁茂するめずらしい植物、埋もれている鉱物を知りつくし、活用する時代が来つつあるという確信にもとづいて編纂されている。

この著作は、成立事情からして当然のことながら、王に捧げられている。その一方で、この世界の富の所有者として、人類一般 (l'humanité) という観念がすでに生まれていることにも注目しなければならない。

ビュフォンは、自然は無数の個体から成立しているものであって、博物学者はまず、先入見な

しに、できるだけ多くの個体をくりかえし観察し、慣れ親しむことが大切であると説き、性急な分類や体系化を嫌って植物分類学を批判するのであるが、自然誌を記述する以上、記述の順序、体系化は必要であった。

たとえば四足獣は、ビュフォンにおいてはまず、家畜(les animaux domestiques)と野生動物(les animaux sauvages)に分けられている。家畜は、ヨーロッパ人にとってもっとも親しい馬からはじまり、ロバ、牛、羊、山羊、ブタ、犬そして野生に近い存在として猫で終わっている。

野生動物は、鹿、ノロ、ウサギなど狩猟の対象となる有益動物(les animaux utiles)からはじめ、ついで狼、穴熊、カワウソ、テン、イタチ、ネズミ等々の有害動物(les animaux nuisibles)が来る。両分類ともに、野生動物といってもヨーロッパ人が身近に見る動物である。

その次には、動物園に行かねば見ることのできないような異国の動物が、旧大陸動物(les animaux de l'Ancien Continent)、新世界動物(les animaux du Nouveau Monde)および両大陸共通動物(les animaux communs des Deux Continents)に分けて論じられている。最後には、記述もれの動物の章もあって、例えば南極に白いクマがいるという情報があるが、標本その他でたしかめられてはいない、といった記述がある。

四足獣についての以上の記述の順序は、あきらかに人間中心である。人間に近く有用な存在から、有害な存在、さらには直接には関係のない遠い存在へと書きすすめている。四足獣は、人間の利用対象、いわば行為の客体である。

わたしは逆に『自然誌』の中の主体的存在である人間、人類(l'humanité)を、ビュフォンが、いかなる範囲で把握しているか、という問題に興味をもった。ビュフォンは1749年に『自然誌』の最初の3巻を出版し、1788年、フランス大革命のまさに前夜に死ぬまでに、「人間誌」、「四足獣誌」、「鳥類誌」、「補遺」、「鉱物誌」36巻を完成させた。のこり8巻はラセペード著である。

大革命を含む十八世紀後半の半世紀に完成され、その後十九世紀前半のあいだベスト・セラーでありつづけた『自然誌』において観察すれば、西欧ヒューマニズムは、どのような姿をあらわすであろうか。

『自然誌』の中の「人間誌」の位置を示すため、次に全44巻の出版年と、各巻の内容を簡単に紹介する。

なお、ビュフォンの『自然誌』は、現在では入手可能な版が無い。日本ではとくに、完全な版で読むことが困難である。本論では、京都大学医学部病理学教室所蔵本(2巻づつ合本製本、全27巻、Aux Deux Points, chez Sanson & Compagnie, 1785-90)より引用を行うが、この版は初版とは構成が大幅に変えられているため、構成は、カナダ、ケベック州立図書館所蔵本(Paris, l'Imprimerie Royal, 1749-1788, 35vols ただし欠本あり)を参照して、初版の構成を再現する。

第2章 『自然誌』の構成と、「人間誌」の位置

『自然誌』全44巻の出版は、七期に分けることができる。第5期以後は、ビュフォンの死後、

ラセペードの仕事である。第1期には、協力者ドーバントン (Louis Jean-Marie D'Aubenton 1716-1800) がいる。各巻において、ビュフォンが生態描写等の「誌」(l'histoire) の記述を行った後、ドーヴァントンがこれと対応する標本館の標本等について描写 (la description) を行うことになっている。ドーバントンの言う「描写」の中には、解剖、骨格標本、はく製標本および顕微鏡レベルの観察がふくまれている。『自然誌』のうち、ビュフォンの執筆した頁だけを読むと、18世紀当時においてもいわゆる科学的というよりも、あまりに人文主義的な記述に偏っていると印象があるが、その一因は記述の分業にある。

なお第2期の「鳥類誌」にも協力者がいる。

I 『一般および特殊の自然誌、王の標本館での描写を附す』(ビュフォンおよびドーバントン著、パリ、王立印刷所, Paris, l'Imprimerie Royal 1749-1767, 15巻)

tome 1 (1749) 方法論, 地球論 (Buffon, 以後 B. と省略)。

tome 2 (1749) 動物一般誌, 生殖, 胎児。

人間の自然誌—幼年期, 思春期, 成年期, 老年と死 (B.)

tome 3 (1749) 人間誌に関連して, 王室標本館の描写 (D'Aubenton, 以後 D.)。

人間誌—視覚, 聴覚, 五感一般, 人種について (B.)。

tome 4 (1753) 神学者との論争 (B.), 動物の本性について (B.), 家畜動物 (B.), 動物の描写について (D.)。

tome 5 (1755) 家畜動物誌 (B.), 描写 (D.)。

tome 6 (1756) 家畜動物誌 (B.), 野生動物誌 (B.), 描写 (D.)。

tome 7 (1758) 野生動物誌 (B.), 描写 (D.)。

tome 8 (1760) 野生動物誌 (B.), 描写 (D.)。

tome 9 (1761) 野生動物誌 (B.), 旧大陸の動物, 新世界の動物, 両大陸に共通する動物 (B.)。描写 (D.)

tome10 (1763) 野生動物誌 (B.), 描写 (D.)。

tome11 (1764) 野生動物誌 (B.), 描写 (D.)。

tome12 (1764) 緒言 (B.), 自然について (B.), 第一見解 (B.), 野生動物誌 (B.), 描写。

tome13 (1765) 自然について (B.), 第二見解 (B.), 野生動物誌 (B.), 描写 (D.)。

tome14 (1766) 猿一覧表 (B.), 動物の退化について (B.), 野生動物誌 (B.), 描写 (D.)。

tome15 (1767) 新世界の猿 (B.), 言及しなかった動物について (B.), 四足獣名索引 (B.), 参考文献著者および旅行者名索引 (B.), 15巻の総目次 (B.), 描写 (D.), 描写索引 (D.)。

II 『鳥類の博物誌』(ビュフォン, ゲノー・ド・モンベイヤール, ベクソン師共著, パリ, 王立印刷所, 1770-1783, 9巻)

III 『博物誌補遺』(ビュフォン著, パリ, 王立印刷所, 1774-1789, 7巻)

tome 1 (1774) 地球論補遺 (B.), 鉱物論序 (B.)。

tome 2 (1775) 地球論補遺—実験と仮説篇 (B.)。

tome 3 (1776) 四足獣補遺 (B.)。

tome 4 (1777) アカデミー入会演説 (B.) 論争 (B.), 平均余命表 (B.), 人間誌補遺 (B.)。

tome 5 (1778) 自然の時期について, 他の論文 (B.), 地図の説明 (B.)。

tome 6 (1782) 四足獣補遺。

tome 7 (1789) 四足獣補遺 (B.)。

IV 『鉱物の博物誌』(ビュフォン著, 王立印刷所, 1783-1788, 5 巻)

V 『卵生四足獣および蛇類の自然誌』(ラセペード著, パリ, オテル・ドゥ・トー, Paris, hôtel de Thou, 1788-1789, 2 巻)

VI 『魚類の自然誌』(ラセペード著, パリ, プラサン, Paris, Plassan, 1798-1803, 5 巻)

VII 『鯨類の自然誌』(ラセペード著, パリ, プラサン, Paris, Plassan, 革命暦12 (1804) 年, 1 巻)

『自然誌』の伝統においては, 動物誌とならんで人間誌が置かれることは, むしろ少なかった。十八世紀においても, サベリアンは, 「動物誌に人間誌をつけ加える動物学者が少数でも現われるようになったのは最近のことである」⁽⁴⁾と言っている。

ビュフォンは, 人類を『自然誌』の対象の中にいれた最初の一人であるが, 彼は「人間誌」を『自然誌』の中でもとくべつな位置にすえている。構成をみればわかるように, 地球論の次, すなわち「自然誌」全体の第2巻目である。

この位置は, ビュフォンが人間に, 地球という, ようやく全体が発見されようとしている新しい空間の支配者の位置を与えようとしていることを示している。

そこにはまた, 『自然誌』の中に「人間誌」を入れるにあたって予想される非難にたいし, あらかじめ予防処置をとることも考えられている。人間を動物のうちに加えるという発想は西欧の伝統にはない。ビュフォンの『自然誌』は神学者たちからつねに, 聖書の教えに低触しないかどうかを監視されていたのであった。じっさい, 最初の3巻が出版されるや, パリ大学神学部からの質問状が寄せられ, ビュフォンは第4巻において, これに答えている。

第2巻「人間誌」には, 「人間は, 外部へ出す記号によって, 自己の内面に起っていることを表現する。人間は言葉によって思考を伝える。言葉という記号は, あらゆる人種に共通してある。未開人 (l'homme sauvage) は, 文明人 (l'homme policé) とおなじく話す。どちらの人間も話すように生まれついているのであり, 他に理解させるために話す。いかなる動物にもこういった思考のしるしは無いのである。」⁽⁵⁾とある。

ビュフォンは言葉をもつたない, 彼によれば思考のある, なしの違いを, 強調する。「人間の能力と, もっとも完成された動物の能力との違いは無限に大である」⁽⁶⁾。

ビュフォンは, 『自然誌』の中へ「人間誌」(《Histoire naturelle de l'homme》)を入れることを実行しつつ, 他方で人間の卓越性を強調し, 他の動物と峻別することによって, 『自然誌』の出版を可能にしたのであった。峻別は, ビュフォンが自然を観察して得た原則とも, 彼が主張した自然誌(博物誌)記述の原則にも反する。ビュフォンは書いている。「わたしたちは, 『自然』

は、見分けのつかぬほど微細な段階をとおって、ニュアンスの差で変るものだと言ってきた。例外というもののないこの真実が、ここでは矛盾を呈する」⁽⁷⁾。「ここ」とは、人間と動物の境界である。ビュフォンは自らの原則の矛盾という犠牲を払って、人間の卓越性を強調しておかなければならなかったのである。

ビュフォンは、人間をすべての動物の上に置いたのち、人類は、一つの種 (l'espèce) である、と主張する。地球上に散らばり、肌の色も言葉もさまざまである人間たちを、単一の種であると主張することも、当時としては画期的なことであった。「人間誌」の中の「人種」の章は、世界のあらゆる人種についての情報を集め、記述している。

第3章 「人種」 (Variétés dans l'Espèce humaine)

ビュフォンは、風土のちがいによって、人間の変種つまり人種が生れたと考える。人種は、肌の色のちがい、体格、そして民族の性格として表われる。変化の要因をもっとくわしく分けると、①風土 (le climat) ②食物 (la nourriture) ③風俗 (les mœurs) である。

「人種」の章において、ビュフォンは、181頁 (Aux Deux Point 版一病理教室本《Histoire Naturelle》tome V) を費いやして、地球上の主な人種をすべて記述する試みを行っている。

ビュフォンが用いた資料は、主として17世紀後半から、『自然誌』の最初の3巻が出版される1749年まで、すなわち18世紀前半の約100年間にヨーロッパで出版されたあらゆる旅行記である。

旅行記の著者、つまり旅行者の旅行の目的はむろん、「人間誌」のための観察と資料収集ではない。冒険家であり、商人であり、あるいは伝道者、軍人である旅行者の観察と分析の力、評価の基準はさまざまである。パリの植物園にいて、自らは旅行することなく、ぼう大な旅行記をつぎつぎと読破しながら、記述をすすめるビュフォンは、情報をえらび、評価の基準を定め、記述の順序を決めなければならなかった。

わたしは、ビュフォンが記述に用いた形容詞に注目してみたいとおもう。さまざまな人種の記述をすすめながら、ビュフォンがしばしば用いる「美しい」、「醜い」あるいは、「白い」、「黒い」という形容詞は、最初に読んだときには、非常に目ざわりで、独断と偏見にみちているようにおもわれた。

だが、よく読むと、ビュフォンは形容詞を無意識に使っているのではなく、形容詞を選び、とくに配列に注意を払って、全体では、連続と段階的变化を表現しようとしていることがわかる。

いくとおりかの主な形容詞の序列が想定されている。

肌の色：「まっ黒」(tout à fait noir) > 「黒い」(noir) > 「茶色、オリーブ色、日焼け色」(brun, olivâtre, basané) > 「黄色」(jaune) > 「白色」(blanc)

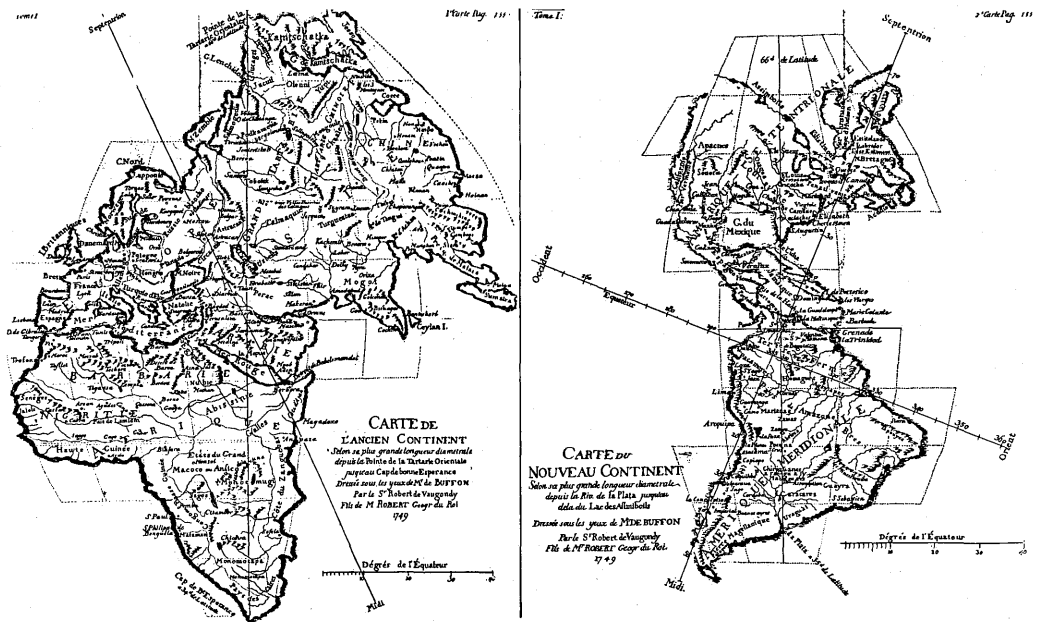
体格：「背が高い」(grand) > 「ちょうど良い高さ」(bien proportionnée dans la taille) > 「背が低い」(petit) ; 「スマート」(bien fait) > 「スマートでない」(mal formé)

美醜：「[たいへん] 美しい」(〔très〕 beau) > 「かなり美しい」(assez beau) > 「美しくも

醜くくもない」(ni beau ni laid) > 「醜い」(laid) > 「非常に醜い」(très laid)

文明度：「開化している」(policé, civilisé) > 「半開化」(demi policé) > 「未開」(sauvage)

その他にも「スマートである」(bien fait) > 「ぶかっこう」(mal formé) や気質をあらわす「陽気である」(gai) > 「陰気である」(mélancolique), 「愚鈍である」(niais) > 「敏捷である」(agile) といった, さまざまな形容詞が用いられるが, 上記の他は, 序列化がされておらず, かなり気まぐれに使用されている。



『自然誌』第1巻より。左は旧大陸, 右は新大陸地図

記述の順序であるが, ビュフォンは, バリの植物園に座している己の位置および, 『自然誌』を読むフランス及びヨーロッパの読者の位置を意識しているらしく, まずヨーロッパの北に住むラップランド人他の北方「未開」人から記述をはじめる。

その後, ビュフォンの言うところの旧大陸の北半分つまりユーラシア大陸を東へと記述をすすめ, 中国人, 日本人で東限に達して, 以後は南下して東南アジア, ついで太平洋諸島, その後はモンゴル, インドついで中近東へ移り, ヨーロッパは南と, 中央および北に分けられている。前半はここで終る。

後半は, アフリカ大陸からはじまる。エチオピア人とムーア人を, 黒人と区別したのち, アフリカ西沿岸を南端まで記述し, 喜望峰をすぎて再び北上する。内陸については, 情報がほとんど無い。

アメリカ大陸は北米の北よりはじめて南下し, 南米を南端まで下る。マジェラン海峡のあたりの情報は, この当時はまだあいまいである。新オランダ (la Nouvelle Hollande) とよばれてい

たオーストラリアについての情報はごくわずかである。

以上の、旅行記を読みつぎながらする世界一周は、前記の形容詞の序列を用いて、おおよそ次のように記述されている。

ヨーロッパ北方に住むラップランド人は「背が低く」、体形は「奇怪」(bizarre)、風習は「未開」である。ラップランド人と北欧居住の諸民族およびタタール人、そして新大陸のエスキモー人は、もともと一つの人種であったとおもわれる。共通して、大きく平たい顔、低い鼻、つり上った眼、ほほの出張り、厚い唇、黒くちぢれた髪、「日焼け」の肌をしていて、「醜い」とされている。生肉を食べることが、「粗野」(grossier)という気質と結びつけられている。

馬と共に生活し、「粗野」というよりさらに「暴猛さ」(la brutalité)を有し、独立心に富むタタール人とは対照的に、中国人は「温和」(mou, pacifique)で、依存的、儀式を好むとされている。肌の色についての旅行者の証言はさまざまである。ビュフォンは、中国人の肌の色は広東では「日焼け色」、内陸では「白い」と形容している。タタール人より色白ではあるが、気質と肌の色の差は風土のちがいによるものであって、体格はよく似ているとする。

日本人は、中国人と似ているが、気候の影響で肌の色はやや濃く、「黄色」または「日焼け色」である。美醜の言及はない。たいへん勤勉で、しんぼう強く、器用そして軽薄 (incostant et fort vain) であるとされている。中国人と共に、古くから「文明化」(civilisé)された民族である。エゾ (Yeco) の住民は日本人よりも、タタール人に近い、とされている。

中国南方の島々、ジャワ、スマトラの住民は、ビュフォンによれば、中国人よりも「日焼け色」で「醜い」。マニラ、フィリピン諸島の住民は、世界でもっとも混血度が高く、したがって、肌の色もさまざまである。パプア、ニューギニア人は肌の色は「黒い」。「未開」であり、「暴猛」、背は「ちょうどよい高さ」とされている。

モンゴル人とインド人も、体格はヨーロッパ人並みであるが、肌の色は濃い。インドの各民族の風習を、ビュフォンは「奇異、奇怪」(singulier et même bizarre)とよんでいる。セイロンの住民は「黒い」、体格は、「ぶかっこう」とであると形容されている。

ペルシャ人、トルコ人、アラブ人、エジプト人、バーバリー人は、以前は一つの国をなしていた、とされる。肌の色は「茶色」、美醜については、特に女性が「非常に美しい」とされる。これには理由があるのであって、ナイル川沿岸では、旅人に娘を提供して歓待する風習があることが記されている。ムーア人の女性も「非常に美しい」とされるが、その子どもはたいへん「白く」、世界でもっとも美しい膚の色をしていると言う。

なお、北緯30から35度の住民はモンゴル帝国の民から、バーバリー人、モロッコの民にいたるまで、相異は大きくなく、男性は「茶色」または「日焼け色」の肌をし、「かなり美しい」し、かなり「スタイルがよい」、女性は「たいへん美しい」のである。

ギリシャ人、ナポリ人、シシリー人、コルシカの住民、サルジニア人、スペイン人は、共通して、フランス人、イギリス人、ドイツ人、ポーランド人、モルダビア人などヨーロッパ北部の住民よりも肌の色が濃く、「日焼け色」である。スペイン人の子どもは「非常に美しい」。

イギリス以北では、黒色ないし茶色の髪はまれであり、デンマーク、スウェーデン、ポーランド人には黒髪の持ち主はない。なおスウェーデン人が長寿である理由は、空気が清浄であることによって説明されている。

旧大陸をひとめぐりしたあとの中間報告は、肌の色は、気候に左右され、体格は食物に左右される。開化の民（un peuple policé）は、安楽な生活を享受するために「美しい」。同じ国の中では都会より田舎の人間が「醜い」。同じ気候条件であれば、未開国の人間は、文明国の人間よりも「日焼け色」をし、「醜くく」、「背が低い」とされている。

さて後半では、アフリカ大陸の住民についての記述がはじまる。エチオピア人は「半開化」の民衆である。ムーア人は回教徒であり、漂泊、独立、自由を好む。セネガル川までがムーア人の勢力範囲であり、セネガル以南に定住する黒人の王国と通商を行い、家畜と奴隷を交換する。ムーア人は「背が低い」、きゃしゃで、繊細であるが黒人は「背が高い」、「肥り」（gros）、体格は「スマート」だが、「愚鈍」とされる。ムーア人は不毛な砂地に住むが黒人は肥沃な土地に住み、栄養が良い。セネガル人は「まっ黒」で、「スマートな」体格、かなりの「背が高い」、女性が「美しい」とされている。

しかし、その後には、セネガル人は「家僕むき」、ギニア人は「耕作むき」、アンゴラ人は「力が強いが体臭がつよい」、コンゴ人は「脱走癖がある」といった形容がつづく。これはあきらかに資料を提供した旅行者が奴隷商人としての評価を下すのを書き写しているのであるが、ここで突然、「旅行者某の証言によれば……」といった記述の調子が乱れ、ビュフォン自身の一人称記述がはさまれているところが、注目に値する。

「彼ら（黒人）には、おわかりのように、勇気があり、彼らはあらゆる徳の芽を有している。わたしは彼らについての（人間）誌を、同情なしには書くことができない。隷属させられ、得るところなく絶えざる労働を課せられている彼らは、十分に不幸なのではなかろうか。彼らをくたくたに疲れさせ、打ち、動物のように扱ってよいものだろうか。こういった嫌うべき行為にたいし、人類（l'humanité）は、憤激するのである。」⁽⁸⁾

人類ないし人間性（l'humanité）という抽象概念がこのときすでに生じていることに注目すべきであろう。

「人種」の章は、ホッテントット人の記述で南アフリカの先端に達する。この人種に、ビュフォンは多大の関心を寄せ、「背が低い」、「たいへん醜い」と形容し、短命は食物が原因としている。肌の色は、黒人の色とやや異なるので、区別してカフラリア人に入れるべきだとする。

喜望峰をまわって東海岸へ出ると、モザンビークとマダガスカル島の住民は「黒い」が、真の黒人ではないとされている。北上するにつれて、「醜い」、の度は減る。東海岸の住民の肌の色が薄いのは、ヨーロッパ人以前に渡来した中国人との混血が多いからと説明されている。

新世界すなわちアメリカ大陸の最も北に住む「未開」人は、旧大陸ラップランド人や、日本の北のエゾに住む人間に似ているので、おそらくは旧大陸から渡ってきたのであろうと考えられている。彼らは「背が低い」、「ぶかっこう」そして「醜い」と形容されている。魚を獲り、天幕

に住んでいる。

ところが、少し南下したところに住む、カナダの「未開」人は「かなり背が高い」、「スタイルがよい」、黒髪と黒い瞳、そして「日焼け色」の肌といった特徴をもつ。旅行者は彼等が「大胆、勇敢、誇り高く、威厳をもち、温和」⁽⁹⁾と証言している。ただ彼等は、あまりに広大な土地に散らばって住むため、文明の一つの印である国（nation）をもたない。ビュフォンは、ここで本題からはずれて、たとえば狼少年やど、社会から隔離されて育った「絶対的未開人」（un sauvage absolument sauvage）を歎察するなら、「哲学者（un philosophe）は、徳は文明人よりも未開人に属するものであり、悪徳は社会からしか生まれない、ことを知るであろう」⁽¹⁰⁾と述べている。

フロリダとミシシッピ沿岸には、カナダ「未開」人よりは「日焼け色」の「未開」人が住んでいる。

しかし、南北アメリカ大陸にも、法によって治められ、王の支配下にいる民族が、住んでいる。ビュフォンはメキシコ人とペルー人を同列において、「開化された」民族と呼ぶ。

カリブ人と国インド諸島の「未開」人は、「日焼け色」または「オリーブ色」をしている。従妹を娶る権利をもち、その姉妹も妻にすると述べている。労働を嫌い、独立を好むので、奴隷にはむかない、とも記されている。「背は高い」、体格は「スマート」である。気質は「陽気」。ブラジルには奴隷がいるが、耕作は好まない、とある。ブラジル人、パラグアイ人、チリーの住民は、いずれとかなり「背が高い」「日焼け色」「オリーブ色」「茶色」である。「赤銅色」（cuivre rouge）でもある。

肌の色については、ビュフォンは、旅行者の証言にもとづいて、アメリカ大陸の住民は「赤い」（rouge）と言うのであるが、この形容詞を黒色から白色への濃淡の順列のどこへ入れるべきか、実際には迷ったらしく、あまり使用しない。

南アメリカについての情報の取捨選択については、ビュフォンはかなりの困難を感じている様子である。まず、肌の色が牛乳のように「白い」インディアンについての報告を集め、一つの人種とみなすか、脱色の起る病気があったと考えるべきかと迷ったあげく、その分布からみて、偶然の事故で肌の色についての人種的特質を失った個体が発見されたのであろうという結論を出している。アマゾン女族については、実在するという証拠を認めない。マジェラン海峡のあたりで身の丈9ないし10ピエ（1ピエは32.4cm）の巨人族ペタゴンを見かけたという報告についても懐疑的である。

南北アメリカ大陸についての記述を終えたのち、ビュフォンは、アフリカ大陸とくらべるとアメリカ大陸は変化が少ないと言っている。形容詞の序列は、旧大陸の場合のように緯度と平行して整然と変化してはいないのである。ビュフォンはその理由を、新大陸の人間は旧大陸から移住しており、移住以後、風土の影響がはっきりとあらわれるほど時間が経過していないと言おうとしている。なお、オーストラリアについては、アフリカのホッテントットに似た人種が住むとのみ書く。情報はまだほとんど無いのである。

約180頁を費いやして、地球上の人種についての記述を終えたのち、ビュフォンは次のように述べる。

「もっとも温暖な風土は、(北緯)40度から50度である。もっとも美しく、スタイルのよい人間が住んでいるのはこの地帯である。ここを原型ないし均衡点と考えて、他にひろがる肌の色と美のニュアンスの差を関連づけるべきである。両極はいづれも同程度に、真実と美から遠ざかるのである」。⁽¹¹⁾

自己の人種偏見とエスノサントリズムを露呈させているかのごとき、そして実際にそのとおりであるこの文章は、しかし、次の結論をみちびくためのものである。

「以上のすべてからして、人類(le genre humain)は、本質的に相異なるさまざまな人種から成り立っているのではなく、もともと唯一、人間という種(une seule espèce d'hommes)があったのであり、唯一の種が地球全体に拡がるにつれて風土の影響、食物のちがい、生活のちがい、あるいは疾病そしてまた似ていたり似ていなかったりする個体が無限に多様に混り合うことによって、さまざまに変化をしたのであるという結論となる。」⁽¹²⁾

地球上の人種はさまざまである、しかし、隣接するもの同志の差はつねにわずかであって、相異ではなく、ニュアンスの差であることが、人類はもともと一つの種であったという結論の証拠とされているのである。

「人種」の章の記述がはじまる前に、ビュフォンは結論を用意していたであろう。形容詞の序列こそ、ビュフォンのとった証明手段であった。

ビュフォンの人間論、ヒューマニズムは、一方で人間を動物から峻別し、他方で人類は人種のニュアンスの差はあるものの、本質的には単一の種と主張して成立している。

「人種」の章は、『博物誌』の第3巻として1749年に出版された。28年後の1777年に「人間誌補遺」の巻が出版されたとき、「人種」は、情報量のいちじるしくふえた章であった。28年間には、クック船長の『世界周航の旅』(<Voyage autour du monde> par le capitain Cook) やブーガンヴィルの『世界周航の旅』(<Voyage autour du monde> par M. de Bougainville) あるいは『旅行記集大成』(Histoire générale des Voyages) 等の重要な旅行記が出版され、オーストラリアについての情報はとくにふえている。

世界情勢とフランス国内政治事情の変化が、ビュフォンの人間論にどのように反映しているかについて、また「人種」の章を執筆するためにぼう大な旅行記を読破したことが、ビュフォンの「人間誌」の他の章に与えた影響については、次回にゆずりたい。⁽¹³⁾

注

(1) <Histoire naturelle, générale et particulière> par M. le comte de Buffon, intendant du Jardin du roi, de l'Académie Française et celle des Sciences> Aux Deux Points, chez Sanson & Compagnie, 以下, <Histoire Naturelle>と省略 1785-90, tome I, p. 237-238)

(2) Cf. Josephe P. de Tournefort; <Voyage d'un botaniste> I, II (La Collection de Poche, La Découverte 55, Maspéro, 1982)

(3) cf. Yves Laissus; Les voyageurs naturalistes du Jardin du roi et du Muséum d'histoire naturelle. essai de por-

trait-robot, <Revue d'histoire des Sciences>, tome X X X IV no 3-4, juillet-octobre 1981.

(4) Savérien; <Histoire des philosophes modernes avec leurs portraits> t. 8. <Histoire des naturalistes>, Paris, 1773 前記 Yves Laissus 論文参照。

(5) <Histoire Naturelle>, tome III, p. 123

(6) *ibid*, tome III, p. 127

(7) *ibid*, tome III, p. 127

(8) *ibid*, tome V, p. 114

(9) *ibid*, tome V, p. 134

(10) *ibid*, tome V, p. 140

(11) *ibid*, tome V, p. 178

(12) *ibid*, tome V, p. 180

(13) 本論は、京都大学人文科学研究所の「18世紀の空間認識」研究会において、1983年7月1日に「ビュフォンの『自然誌』をめぐって」、1984年10月12日に「ビュフォンの『人間誌』」と題して行った口頭発表の一部である。

参考文献

ビュフォンの『自然誌』の版については、本文に述べた。

— *Oeuvres Philosophiques de Buffon*, texte établi et présenté par Jean Piveteau, Corpus général des philosophes français, auteurs modernes, tome XL I, 1, Presse Universitaire de France, Paris, 1954.

— Léon Bertin; *Buffon*, Muséum national d'Histoire Naturelle, Paris, 1952.

— Jacques-Louis Binet et Jacques Roger; *Un autre Buffon*, collection Savoir, Hermann, Paris, 1977

— Jacque Perret; *Le Jardin des plantes*, Juillard, Paris, 1984

— Yves Laissus; *Les voyageurs naturalistes du Jardin du roi et du Muséum d'histoire naturelle: essai de portrait-robot*, Revue d'histoire des sciences, tome X X X IV, no 3-4 juillet-octobre, 1981

— Michel Foucault; *Les mots et les choses*, Gallimard, Paris, 1966

— Pierre Gascar; *Buffon*, Gallimard, Paris, 1983

— 木村陽二郎著『ナチュラリストの系譜 — 近代生物学の成立史』, 中公新書680, 1983

— 荒俣宏著『大博物学時代』, 工作社, 1982

— 荒俣宏著『図鑑の博物誌』, リプロポート, 1984